

梅雨ばいう

波の音がする。潮の香り、好きか嫌いかで判断するには当り前あたまえすぎた、令人れいとは時計をみて時間を確認する。

「何時？」

淑音しとねがきいて来る。時計をみせた、画面には数字が浮ぶうか、厳格いかつい、兄が中学の頃流行していたものだという。お下りさがだが令人れいとは其時計そのを気に入っていた。

淑音しとねは海を見ている。クラスメイトよりは少し長い髪が風に撫靡なびく、さわりたいと思っ
た。

「染めるなよ」

気もちを隠して淑音しとねにいう、淑音しとねは問う様に頸くびを傾かしげた、

「二組の女子で、髪染めんの流行^{はや}ってんじやん。まあ似合う子はいいんだけどさ、似合わない子の方が多^{おほ}いって、絶対^{ぜったい}」

「私には似合わないって？」 淑音^{しとね}は髪をつまんでかすかに笑う。

「まあ、正直にいえば左^{ひだり}ういうことだよね」

「そこは嘘でも似合うっていえよ」

淑音^{しとね}が笑って軽く殴^{なぐ}る。拳^{こぶし}の当^{あた}った右肩^{みぎかた}が、熱^{あつ}くなった様に感じられた。電車がきたのでのり込む。朝^{あさ}なので、人は多い。

「私も少しぐらい染めたいんだけどね、お父さんがだめだって。高校生になってからだっていうんだけど、違いがわかんないよね。中学生と高校生って、其^そんなちがうのかな。人士^{ひとし}さんは、なにか言^いってた？」

兄の名前をだされてはつとずる、「兄貴^{あにいもうと}はどうだったかな、別に変^{かわ}んねえっていつてた気がするけど、ああでもバイト始めて金持ちになつてたかな、時々奢^{おご}ってくれたし」

五つ上の兄のことを思い出す。いまは大学

生で一人暮らしをしているので、時々しか帰って来ない。淑音がくすくすと笑った、「なに？」

「兄貴って、きくの、まだ馴れない。ちょっと前はお兄ちゃんお兄ちゃんって後喰っついて歩いてたのにね」

「恥ずかしくなった、「ちょっと前って、もう三年位前だろ、小学生の時だ。って、そうだよな、いま中三だから、もう三年前になんのか、うへえ時間が経つのは早いなあ」

「なにいつてんのよ、それに中学生になった瞬間から兄貴っていい出した訳でもないでしよ、ね、いつ頃からいい出したんだっけ、なんか切懸けでもあったの」

話を外らしたかった「うるせえなあ、ねえよきっかけなんて。単にお兄ちゃんって呼ぶのが恥しくなったんだよ、そんなことより、おじさん、そんな厳しかったっけ、昔しからそんなにごちゃごちゃいわない人だったけど」

「うーん」淑音しとねは考えた、「中学生になつてから急にね。いままで厳しくて、ってことなら分わかるんだけど、急にだからむかつくんだよね、まあだからって喧嘩してまでそめ様とも思わないけどさ」

「やっぱり」言った所で駅に着いたのに気が付いた。津倉駅つくら。学校があるのはまだ先の駅だが淑音しとねの顔色かほが変かわる。

「先生」指先で令人れいとに別れを告げると、のり込んできた細身の男の所へ寄って行く。令人れいとは暗い気もちになった。淑音しとねの「お早はやうございます」が聞きこえて、靴かばんからイヤホンを取出とりだすと音楽を流した。

夢中できいた。

海沿いを走る電車は、古くて、この地域の名物なぶつになっている。旧態ぼろで、短みじかい、なにがいいのか分わからない、遠くから乗りにくる人もあるという。風物ふうぶつとしては古刹こせつや海など名だから、電車でんちやが目的たけというのでもないだ

ろうが、彼等かれらのいう情緒じょうしよがわからない。学校の奴らは二つに別れる、いいじゃん、この町の誇りだよ、と肯定する奴か、古臭くて、名物のせいで、やたらに混む、迷惑だと疎むうと奴か、淑音しとねは、いつていたな、いいんじゃない。あたしは好きだよ、でも、高校も卒業したら、出て行きたいとも思ってるけど。令人れいとは高校を出てからの自分を想像できなかつた。

中学では、部活動でバスケットボールをしている。練習の終わりごろ、ひよつと淑音しとねがやって来る。

「もうおわる？」

「ああ、もうすぐ」

「じゃあ迎えに来てね」

どこへか姿を暗くらました。部員の連中がいなくなつたのを見届けて騒ぎ出す。

「てめえ嬉いちゃ戯やついてんじゃねえよ」

「いいなあ淑音しとねちゃん、俺も一いっしよ所に帰ってえよお」

「其^そんなんじやねえよ」令人^{れいと}は嫌な顔を
してつぶやいた。夫^{それ}は嫌な顔になったのか、つ
くったのか、わからない。後輩^{ごはい}まで付突^つき出
した。

「やっぱ先輩^{せんぱい}凄^{すこ}いっすわ」

「ねえ、ねえ、どこ迄^{まで}いったんすか」

「うるせえ！ お前^{まへ}ら片付^{かた}けどうした」こ
ちらは怒鳴^{いか}ると蜘蛛^{くも}の子を散らす様ににげて
いった。

部活^{ぶくわく}の後は疲^へれて疲憊^{へいと}になるが、時々^{ときどき}淑音^{しとね}
と帰^{かえ}る日^ひがあつて、左^{ひだり}右^{みぎ}いう時は心^{こころ}もちが
かわる。心^{こころ}が浮^うき立つ、誘^{さそ}われた其^{その}一^{だけ}瞬^{だけ}丈^{だけ}は。
重^{おも}いバツグを肩^{かた}に掛^かけて理科^{りか}室^{むか}へ向^{むか}つた。

日^ひは暮^くれていて、雨^{あめ}の音^ねだけが、はつきりと
存在^{そんざい}する。理科^{りか}室^{むか}の電^{でん}気^きはついてい^いなかつた。
窓^{まど}の近^{ちか}くには外^{がい}灯^{とう}があつて、其^{その}光^{ひか}りが、淑音^{しとね}
をかすかに浮^うび上^あらせる。淑音^{しとね}は教壇^{きょうだん}にいた。
椅子^{いす}に座^まつて、机^{けい}に顔^{かほ}を臥^ふせて、幸^{さい}せそうに
目^めを眠^ねっている。

「ほら、帰^{かえ}るぞ」

声をかけるが目は披かない。「あと少し」
 怠惰に答えて少し笑う。令人はとなりに椅子
 をもつて来た。座ると淑音が目丈披いた。「ね
 え、夜の理科室って、神秘的じゃない。ぼう
 つと光って、これから、いまにも動き出しそ
 う」顔を傾むけて令人を見上げる。

「これが月明りだったらな」

令人はそつ気なく答えて、「それにおれは怖
 えよ」室を見回して加えた。

「風流がないなあ」

淑音が独語く、立ち上った、伸びをして、
 帰り支度をする。

「匂いでも嗅いでたのか」

動揺が声に出ないように、抑える。教壇を
 見たが、名残はなにもなく、きれいな丈だっ
 た。

「ちがうよ、只、考えてただけ。この場所
 に立って、授業したり、私の言葉に答えてく
 れたり、……」

遠い目をする淑音を見た。令人は椅子をし

まう。「鍵はもってるんだろ」訊くとチャラチャラと音を鳴らす。

「化学部の部長ですから」

扉をしめて、鍵をかける音が響いた。中学の一年の時、一年間だけ淑音は引越しをしていた。おじさんの仕事の都合で、最初は何年後に戻ってこれるかわからなかったという。物心ついた時から一緒にいた幼馴染との別れを、令人は悲しんだ。夫でも表立って悲しむことは憚られて、振っ切ら棒に「ほら」といって餞別を手渡した。夫は小さい陶器でできたイルカのキーホルダーだった。「ありがとう」淑音は泣いてお礼をいった。令人はなにもいわず走り去った。走って走って山へ登って、どれが淑音ののった車か、どの方角へ行ったか、丸で分らなくなったことに気づきながら茫然りと遠くをみていた。

一年後に戻って来た時も淑音は其キーホルダーを持っていて、「宝物」といって笑ってくれた。令人は嬉しかった。だから其キーホ

ルダーと、もう一つ増えた宝物、理科室の鍵が喰くつついて一つになった時、なにもいえなかった。

宝物同士だね。

淑音しとねは左そう言いってキーホルダーを抱き締めた。令人れいとは淑音しとねのこを見ていた。やがて目を逸そらすと、遠くの海をみて、波の寄せる音をかすかにきいた。

淑音しとねはベッドに仰あおむ向けになった。幸福感が押し寄せ、次ついで恥ちずかしい気もちが湧わく。叫こゑび出いしたい位くらい恥ちずかしくて、何なんで此こんな気もちになるんだろうと思う。

「先生、映画行きましょう」

予あらかじめ、きょう言いおうと決意けつぎして臨のぞんだが、用意よういした言葉ことばは凡すべてむだになった。口くちが顎あご々がくして、先生が構かまえない様に無邪むじゃ気な感じを出そうとしたが、装まえたという自信じゆんはない。

「映画？」

「そう、あたし、いま見たい映画があつて、

夫それが凄すごい泣ける映画らしいんですよ。外国の、朝は日を抱くっていうの、知ってますか？なんか奇病を治療しようとするお医者さんの話で、実話がもとになってるって聞きました。私の友達、恋愛映画が好きな子ばかりで、いっしょに行ってくれる子がいないんですよ。私の趣味って年相応じゃないんですかね。一人で行くのはちよつと淋しいんで、先生つき合ってもらえませんか」

背のびをしたかった。其その映画を本当にみたくと思ったのかも、わからない。ただ、こどもだと、思ってた欲しくなかった。だからいえばつたわ伝つたるわと思った。本当は、いっても、つたわらない。寧むしろ安易むしに言葉にすれば、相手が疑うたがいを抱くことさえある。自分がどんな人間かは、相手がきめることだ。平生ふだんの行動から、言葉から、相手が時間をかけて感じて行くものだ。でも淑音しとねは（令れい人ひとも）、説明さえすれば通じるものと思っていた、この時点では。

「ああ、みたよ」西浜にしはまはいった。「夫それの原

作って結構有名な小説でね、本屋で働^{はた}らいてる友達が試写会に誘ってくれたんだ。なかなか面白かったなあ、ぜひみて御出^{おいで}。全然難^{むず}かしい内容じゃないから、友達と行っても楽しめると思うよ、みたら感想きかせてね」

めがねを拭きながら答えた。淑音^{しとね}は動悸^{どうき}を感じた。先生が興味を持ちそうだと独断できめた映画が何本かあつて、最初にこれで誘おうと思ひ定めたのが別にあつた。しかし夫^{それ}はもう公開して二日経っていたので、まさかもう見たということはないだろうが、万全を期してまだ始まっていないこちらの映画にしたのだった。夫^{それ}が裏目に出るとは、試写会なんてありか？ 思ったがとり敢^{あえ}ずしやべつた。

「じゃ、じゃあ吐息^{といき}をひそめておやすみをつけて映画はどうですか、こっちはまだ始^{はじま}つたばかりで、あんまり話題の映画って感じじゃあないんですけど」

「ああ、見たよ、其池^{そのち}は其^そんなに好みじゃなかったかな」まだめがねを拭いて居る。「で

も、気に入ったシーンもあったな、主人公が、目の前でねている好きな子にね、なにか言おうと口を披ひらくんだけど、迷って、言うのを廃やめるんだ。そとでは雨が降ってて、画面は、窓をうつす。雨の音は少し強くなる。僕はそこで、主人公がやっぱりなにか言ったんじやあと思うんだけど、言わなかったかもしれない。想像の余地があつたんだね。もし見るこゝとがあつて、もし覚えてたら、其所そこの解釈も教えてよ」蛍光灯に透すかして汚れの有無たしかを確かめる。

淑音しとねは完全に焦あせっていた。「先生、映画好きなんです」最初の候補もだめとは。「私が見たいと思つてたの見てるなんて、さすがです。其映画そのは後日みれたら絶対報告しますんで、もし次何かみに行くのあつたら、誘つて下さいよ。私結構どんな映画でも好きになれちゃうんで、これからの勉強のためにも、あ勉強あつていっても人生の勉強あつていうんですかね、のためにもぜひ伴つれて行つて下さい」

焦った儘しやべる。

「次、か」西浜は傾むけながら確認しているためがねを掛けた、「そうだね、じゃあ稲村さんが卒業して三年ぐらい経ったら誘わせて頂こうかな」少し笑って淑音をみる。

「三年つて」出て来た年月にぐらりとする。

「私、十八ですよ。やらしいなあ映画行くだけじゃないですか、なんか意識してるんですかあ私身の危険感じちゃうなあ」怯える伴で身を竦ませる。

今度は明然笑った、「ぼくに取って、女の子と出懸けるっていうのは左右いうことなんだよ。だから、三年後に、きつと行こうね」まっすぐに淑音を見る。

淑音は痺れた様になった。其目が優しくくて、笑顔が優しくくて、届かない事を感じた。自分が理科室にいることを思い出した。外の化学部員はみんな帰っている。外部からは、運動部の懸声が聞える。もう少し丈先生と話して、先生は仕事があるというので職員室へ戻っ

た。

淑音は其儘茫そのままぼうとしていた。気が付くと、バスケ部が終る時間おわだったので、令人れいとに声を懸かけに行つた。戻つて来てまた茫ぼうとした。先生のことを思い返した。細くて、背が高く、笑顔の似あう男の人、……淑音の胸しとねには幸福感が満ちた。

しかし帰つてみると、まさか断ことわられるとはなあ、と言う思いが萌きざした。断ことわられる可能性を考慮しなかつた訳はないが、先生の性格上、いいよと了承するだけして今度ねいつかねと先延さきのばしにし続けるのではと思つていた。だから其所そこからいかに約束を楯たてにして履行りこうを迫るかを重おもに策謀さくぼうしていた。夫それが、其所そこにさえ、到達できないとは。淑音は自分の樂觀や、焦つて仕舞しまつたことを恥はずかしがったり、おち込んだり、先生のことを思い返したりした。

淑音はご飯よと母親に起おこされるまで、いつか眠つていた。左手には宝物の鍵が握り締しめら

れていて、鍵のギザギザが手に痕をつけて少し、痛んだ。

「大町、お前、稲村さんと別につき合っていないってほんと」

体育の授業はハンドボールだった。令人の部活動であるバスケットボールと、ハンドボールはルールが似ていることもあり、令人は活躍した。そも、令人は大抵のスポーツで活躍できる。部活動でも、一番二番を争う伎倆だと、自信していた。しかしそんなことに何の意味があるだろう。中二の途中まで単純に感じ、酔うことの出来た達成感や自尊心を、信じ悪くなっている自分に気が付いた。

「ああ、そうだよ」令人は答える。「みりやわかるだろ」

汗を霑いたので、顔を洗っていた。置いてあったタオルを、質問した坪内が取ってくれる。

「見たら誤解するだろ、毎日一所に登下校

してんだから」

「毎日じゃねえよ。家が近いから、時間が合えば時々帰る位のことだよ」

行きのことにはふれなかった、淑音しとねから一所いっしょに行こうと頼まれていることには、「それにしたって、始しよつちゆういっしょ終いっしょ一所いっしょにいるだろ。でも、まあ、つき合つてはないんだな」

「ああ」顔を拭ぬぐうと晴れた空が目に着いた。背中に汗が滲にじむのが感じられる。梅雨つゆだから、はれると、嬉しい、とくに体育の日は。しかし余あまりにも暑くて嫌になることもある。

「じゃあさ、一寸ちよつと、協力してくれよ。つき合つてないんだったら、問題ないだろ」

「協力？ 協力って、なにを」

「稲村さんのことだよ、俺とお前と、稲村さんに友達一人呼んでもらってさ、デートしようぜ。二人だったら警戒されるかもしれないけど、四人だったら平気だろ。どう？」

「あれ、お前と淑音しとねって、同じクラスだっけ」

「そうだよ、二組、だから体育一所いっしょにやっ
てんだろ。でもああ淑音しとね、淑音しとね、淑音しとねちゃん
かあ、いいねえ其呼び名その」

「まあ、小学生の時は、座布団ざふとんっていわれ
てからかわれてたけどな」しとねという語ことば
には、座布団という意味がある。小学生の時、
或男子生徒あるが其ことを調べ上げて来て公表し
た。淑音しとねに気があった男子連れんは、此些細な接
点を嬉しがって積極的に採用した。淑音しとねは最
初、例えば令人れいとに為替相場かわせそうばというあだ名を付
けて抵抗する杯などしたが、こちらは今いち要領
を得ず呼びにくかった為成功したとは言い難がた
かった。其内淑音そのしとねは泣いた。先生は怒り罪悪
感が胸に迫り少年達は罪科ざいかを押し合おしった。
結果令人れいとが重おもに責任を負った。令人れいとは黙もくしだ
れのせいにもせず潔いさぎよよい態度を装まったが、夫
は単に令人れいとが調べた本人であり一番口に出し
て泣かせたからだった。

「座布団？ 何で其様なあだ名がついたん
だよ」

「しとねって、座布団を意味することばなんだってさ、あと布団とか、敷物とかか。おじさんおばさんがしってて名前つけたのかわかんないけど」

「ふーん、ひでえ奴だな、そんなあだ名をつけた奴は、ああもし俺が居たら片っ端からぶん投げてやんのになあそんな奴等は、淑音ちゃんのヒーローになりたい」夢みる様に手を合わせた。「で、どうなんだよ、手伝ってくれるのかくれないのか」

合わせた手の儘此方を見る坪内を、見返した。坪内は、かっこいいというより、可愛らしい顔をしている。夫でいて柔道をやっている、結構強いらしく、其ギヤツプが不堪らしいという評価を、女子から聞いたことがある。令人は想定した。少し上に目を遣ると、黒く厚い雲が奥から膝行って来ているのに気が付いた。

雨の音がする。風が強くて、窓を能く叩く。

ここ数日、仲々雨の霽み間がない。令人が自分の室で窓を見ていると、淑音が手を差し出した。

「はい、ラブレター」

受け取って、確認するが、名前はなし。「だから？」訊くと「二組の奈緒子ちゃん」と答える。

「どんな子」

「かわいいよ。ちよつと大人なしいけど、優しくして、令人には合うんじゃないかな」

「ふーん」どうでもよく聞える様に独語く。

「知らないな」

「なにしてんの」

怒った声に驚ろいて淑音を見ると、自分の手を見ていた。手紙を破り掛けていたことに気付く。

「お、あ、ちゃんと、机にしまつてと」

「読みなさいよ」淑音がジロリと令人を見る。「夫から返事もね」ベッドに座って威儀を示す。

夜、淑音しとねは令人れいとの室へやに来て居た。淑音しとねの家は令人れいとの家から二件隣りに有り、時々遊びに来る。令人れいとは淑音しとねの家へ行かない。こどもの時の様に、気安くはいけなくなつた。だから同じ様な気安さを保っている淑音しとねを、疎うとましく思う気もちもある。

「だつて話したこともないのになあ、どこが気に入つたんだろ」

「バスケしてる姿がよかつたんだつてよ、まあ書いてあると思うけど。いいじゃない、別にすきな人いないんでしょ」

夫それには答えなかつた。「まあ、断ことわつといつてよ」

淑音しとねはため息を吐ついたが夫それ以上の追及はしなかつた。女の子から手紙を貰もらつたのは、始めてではない。告白された事も、何度かある。然しかし心が動いたことはなかつた。

「どうせ欲しいものは……」知らず口に出していた。

「なに、欲しいものつて」

「ん、ああ」少し狼狽する。「名誉とか？」
口から出るのに任せる。

「なにそれ、名誉なんて、別にいいじゃん。
もつと大切なものあるでしょ」

「そうかな、夫^{それ}つて、ミュージシャンとか
が名誉なんて要^いらないとか、能^よくゆうからそ
んな気になつてる丈^{だけ}なんじゃない。俺^おれは、
ほめられたいとか、思うよ、認められたいと
か」

「令^{れい}人^{いと}つて」淑^{しと}音^ねは首^{かし}を傾^かげた。「時々変
な事^{こと}いうよね。余^あまり、夫^{それ}つて、いい気もち
じゃあないと私は思うけど」

言^いわれると左^そうかも知れないなと思った。
自分の意見を主張^しりたい訳^{わけ}ではないので、
令^{れい}人^{いと}は黙^もった。淑^{しと}音^ねもそれ以上言^いわなかった。
テレビの音^{こゑ}が、雨^{あめ}の音^{こゑ}を攪^かき交^まぜる。其^{その}光^{ひかり}を
二人は暫^{しば}らく見た。不^ふ意^いに淑^{しと}音^ねが声^{こゑ}を騰^あげた。

「あ、そうだ、映画行^いこうよ、みたいのが
あるの」

「映画？」或^{ある}記憶^{きこく}が頭^{あたま}を刺^し戟^{げき}する。「映画

って、二人で？」

「なによ今更。へたに人誘って気を遣う方があたしは嫌だよ」

「いや、そりや、そうだけど……」きおく「気後れしながらきく。「お前、坪内から、何か誘われなかった？」

「え」しとね「淑音が驚ろく。おど「何で知ってんの」
「まあ、ちよつと、わけあり「訳有でな。で、行かないの」

「断ことわった。坪内君とはけっこう話すけどさ、二人でって言うんだもん」

「そうか……」

坪内の依頼を断った事を思い出す。四人でというのを、断わった。面倒だと言う理由を即けた。いいじゃん頼むよと喰い付つかれた。断わっても、断わっても、頼まれるので、半なかば意地になって断わったら、もういい自分で誘うと怒って行った。

「まあ、いいけどさ、何なんて奴やつ」

「吐息といきをひそめておやすみをつて奴それ。夫か

ら、もう一寸経つたら朝は日を抱くつてのにも行くからね」

「何だそれ、全然聞いたことない、其んなのどこで調べてきたんだよ」

「先生がね」淑音は窓を見た。「先生が見たんだって」横顔さえ見えなくなった。

令人の気もちに蔭が出来た。中学二年生、一年も前じやない、少しずつ、少しずつ、「先生」の話題が増えた。夫と同時に、自分の気もちが裸形になった。運動が出来て、夫を賞められても、女の子に告白されても、只、有頂天でいる事が出来なくなった。令人も窓を見た。令人は窓の、窓に当る雨の、其隙間を見た。淑音がなにを見ているのかは、わからない。令人は立ってカーテンを閉めた。椅子に戻る時、少し赤らんだ淑音の頬が目に着く。

「部活の日を避けてくれたら、いつでもいいよ」優しい言い方になっていた。「淑音の予定に合わせるからさ」夫を忌々しくも思った。

「ありがと」淑音はまだ窓を見ていた。窓

のそとの夜は、もう室へやから消えた。「淑音しとねちゃん、晚餐ごはん喰たべて行くでしょ」台所から母親の大声が届く。「はあい、いただきまーす」不自然しとねなくらい、勢しとねいを付けて淑音は答えた。

「そういえば、映画って、お前……」

見る前に言った不安は見事に的中した。

淑音しとねは「なに」といつて思おもい中あたることはないという態度せうだったが左ひだりうだった、淑音しとねはすぐねることを思い出した。

昔むかしから、映画に行くくと、大抵途中でねた。

はやりのアニメなどが映画になると、「見たい！」と言いい出ですのが淑音しとねで、付き合あわされるのが令れい人とだった。令れい人とは途中で寝たことがなかった。だから淑音しとねの抜ぬけたストーリーを填てん補ほさせられた。夫それでいて「面白おもしろかったねえ」と満足するのはいつも淑音しとねだった。

淑音しとねと行ったのは重おもに小学生の時ときで、今回行くのは一年振ふりぐらいだったと覚おぼえているが、淑音しとねの性か質わは変かわらなかつた。三十分くら

いから仮睡し始め、夫でも耐えた方だが、一時間をすぎた辺りで寢息が聞えた。先生が見たんじゃなかったのか。寢息をきくと苛烈いた。しかし映画よりも其呼吸に意識を擒られた。

「何で寝ちやうのかなあ」

淑音が嘆息するのを意外に思った。映画館を出た後、食事をしていると、言った。

「きようは絶対大丈夫って気がしてたのに」

「退屈だったんだろ」スパゲティを巻きながら令人が答える。

「ううん、面白かった、面白かったと思うんだけど、……」

「先生は、何て言ってたの」

「あ、先生は、其んなに好みじゃなかったとか言ってたかな左ういえば」

淑音は紅茶を飲んでいた。ストローから紅茶を啜って、考える仕草になる。

「じゃあ、いいかな、左右いうことで」

「どういうことだよ。まああの映画も、中

途半端だったよな、主人公があの子のことすきなのかも判明はつきりしないし。なんか、一度、その女の子が寝てるのを見守るシーンがあつてさ、何かなん気の利きいたことでも言えればいいのに、口だけ披ひらいてなにもいえないんだ。映画の主人公なんだから、もっと、かつこよ好よく生きて欲しいんだよな、好きなら好きってバシツと決めて欲しいし」

「言つたんだよ」淑音しとねが身をのり出す。「あの子はね、あのシーンで、きつとなにかを言つたんだよ。だって画面は窓をうつしてた訳だからさ、ほんとになにも言わなかったかわからないじゃない。想像の余地があつて、あそこは私すきだったな」

「想像の余地って、赤毛のアンじゃないんだから、第一お前その時寝てなかったっけ」
「起きてたの」思しわぬ勢いきおいでいう。「ていうか、赤毛のアンって、どういうこと」

「赤毛のアンで、想像の余地って言葉が、よく出て来るんだよ。何で自分でいっといて

知らないんだ？ おれは中一の時に読書感想文で読んだから覚えてたけど」

「赤毛のアンか……」淑音は落着いて又紅茶をのんだ。なにを考えているのか分らない。浮ついていて変だなと令人は思った。

天気が曇りで、いつ降り出すかわからなかったので二人は帰った。令人は着替え、バスケットボールをもつと、近所の公園に歩いて行った。歩いて五分の所にバスケットのゴールのある公園がある。公園には既に部長である佐島がいた。

「おう」

声をかけると佐島が答えた。暫らく二人で練習する。パスや、シュートをくり返してから、対戦した。おわると並んで休んだ。

「なあ、令人、朝練来てくれよ」

佐島が不意に言った。

「やっぱ後輩にも示し付かないしさ、令人、レギュラーじゃん。やっぱ率先して練習に来て欲しいんだよね、俺としてはさ」

バスケットボール部は略毎日授業が始まる前に練習をしており、令人は夫に参加していなかった。

「俺より、まず野比に言えよ。顧問なんだからもつとやる気出せつてさ、まあ俺としては休日休める方が嬉しいけど」

「それはそうだけどさ、ほら、それは俺一人でいうより令人とかも力を合せていった方が効果ある訳じゃん、最後の夏だし、やっぱ俺は力を出し切っておわりたいたい訳よ」

「最後の夏か」令人は考えた、「まあ、左右だな、お前がおれの六合に一滴を点ず、を返してくれたら参加してもいい」

「さーて練習するかあ」佐島は立あがって練習を再開した。佐島は令人に頭があがらない。令人がもっていた六合に一滴を点ずというCDを、佐島に借したら、二度と返って来なくなった。夫は枚数が限定されている貴重な品で、令人が夜通し並んで手に入れたものだった。扱かいには気を付けるよう嚴重に注

意して借かしたら、牛乳を零こぼし狼狽し踏み付けた。一時いつときは一カ月全まった口を利かない程怒った。いまも思い出すと蟠わだかまりを感じるが、瞋いかりと言う程ではないので、怒ってないよと言う。しかし事ある毎ごとに引き出して佐島を苦しめるのが常つねだった。

又また二人で練習していると、空が晴れて来たが、いい時間になったので帰った。令人れいとは最後の夏という事を思った。

一年前、令人れいとは、今よりも熱心に部活に参加していた。憧あこがれていた先輩がいた。灘方なだかた先輩といった。男前で、気きさくで、バスケが抜群に旨うまかった。其人そのに近ちかづきたいと、又また、力ちからになりたいと思おもって、練習に励んだ。

実際チちーム全ぜん體たいも、旨うまい人が多かった。顧問も過去何年かで一番いいチちームだと、自信じゆんを持って言った。県大会が迫おそっていた。組ぐみ合あわせはもう極きまってあり、二回戦で、去年優勝した学校と中あたることが分わかっていた。勝かちてる見込みこみ

は少なかつた。然し今年の自校なら或はと、期待させてくれる何かが先輩にはあつた。先輩も優勝校を倒すぞと公言した。チームは打倒することを目標に一丸となつた。

大会が始まると、令人は茫然とした。一回戦、全たく意識していなかつた無名校は、大型の選手を各地から集めて来ていた。大きい丈でなく、うまかつた、強かつた、令人の学校はまつたく歯が立たなかつた。令人はベンチで応援することも忘れた。最初は指示を飛ばしていた顧問も、黙って座っているだけになつた。殆どの部員が言葉を失なつた。灘方先輩は最後まであきらめなかつた。其すがたに胸を打たれる一方で、「こりや相手がわるかつたな」と独語いた顧問の言葉を、打消すことの出来ない自分を感じていた。

先輩の最後の夏はこうして終つた。「来年はお前らが倒してくれよ」先輩は冗談をまじえてこう言つた。令人は先輩に対して、失望した訳でも懂がれが消えた訳でもなかつた

が、始めて終りのことを考えた。突然くる終りのことを。ことしの自分達が、先輩達に、明かに劣ることも考えない訳に行かなかった。

夏がおわって、最初の方は朝の練習に参加していたが、其内体調が悪いといって行かなくなつた。夫でも一二週間休むだけの積だつた。ほんの少し距離を離して、元の調子をとり戻そうとした丈だつた。朝通常の授業にあわせて登校すると、毎日淑音に会つた。

「朝練どうしたの」と訊くので、「部長がかわつてな、朝はやんなくなつたんだよ」と嘘を吐いた。放惰っているというのは些さか憚かられた。「ふーん、それじゃあさ」淑音は顔を背けて言った。「朝、一所に行つてくれない？」恥しがる時の淑音の癖。

「先生が、この時間ぐらいに、のつて来るんだ」

先生の話が増えて、でも少し気になる位のことだろうと思つていて、夫が本気なんだ

と知ったのは、此時だった。「先生来るんなら、俺いる必要ないじゃん」令人も視線をはずした、「時間、不定期でさ、仕事がある時はもつと早いんだって。先生いるかもと思つて、いないと、何かよくない気もちになるんだよね、だから、令人、つき合つてよ」視線をはずすと追つて来た。

「いいよ、わかった」優しい言い方になっていた。「其代り、朝迎えに来いよ」終りのことを考えたのかもしれないなかった。

いつか来る終り、最後の夏、此梅雨も、すぐにおわりがくる。自分が犠牲にしたもの、自分の為になったこと、一つ々々勘定したが、茫漠な夫を把握し得る程明確な頭を令人はもたなかつた。

緑色の髪の毛の子が、酔って、ふらふらと歩いている。頭というのは髪の毛のことだ。テレビの画面で少年は煩悶していた。

令人の部屋にはテレビと、ビデオがあつて

淑音しとねが借りて来たDVDで映画をみている。まんがが原作の映画で、とてもおもしろかった。しかし淑音しとねは始はじまって一時間もせずには寝た。

先生のお奨めすすの映画なのだそうだ。此所このところ、夫それを仕入れて来ては、令人れいとの家で見ている。自分の家でみると言うと、寝ちゃったら、筋がわからないじゃないという。令人れいとに見させて、寝ていた部分の辻褄つじつまを合せ、感想を其儘そのまま引用する事もある様だ。実際、先生に奨められたものは面白いものが多かった。夫それも癩しやぐに触った。筋がわかるまで、何度でも見ると言う。面倒なのか、首を豎たてには振らない。

面白ければ寝ないというのでもない様だった。八割の確率で寝るから、残りの二割は起きている訳だが、見終みおわって首を捻ひねることもある。最後のあれはどういう事だったの。令人れいとの感動した部分の、解説をすると、うーんと唸うなって興きよう趣しゆを解かいさない。

先生とは趣味があわないんだよ。言おうと

したこともあった。冗談をまじえて、或はポツリと。しかし其語が頭に湧いて、迷っている、いつも機をのがした。言われた淑音の反応を考えた。悲しがるだろうか、佛然になるだろうか、試して見る程には、令人に好奇心がわかなかつた。

四人でデートする日が近いていた。四人というのは、令人と、淑音と、令人に手紙を送って来た奈緒子、夫に以前淑音との仲をとり持てと迫って来た坪内のことだった。少し前、吐息をひそめておやすみという映画を見に行った時、淑音と令人を目撃した生徒がいたらしい。後日坪内がやって来た。

「大町、お前、稲村さんと映画行っただけ聞いてたけどほんとか」

何も考えずに答えていた。

「ああ、行ったけど」

「どういうことだよ、お前つき合っていないって言ったよな、俺の頼みを断わつていて自分二人でデートか？ ふざけんなよ」

胸倉むなぐらを攫つかまれた。坪内は柔道部なので、いまにも地面に叩き付けられそうに思う。内心危険やばいなと憚びびったが、平静を装よそおった。

「まあ、おち着けよ、あれは淑音しとねに頼まれでだな、仕方なく、別にお前を欺だまそうとか出し抜こうとかそんなんじゃ」

「頼み？」真剣な眼光で睨む。「稲村さんに言われたら言う事きくつてののか」

「まあ、そうだな、その時々によるけれども、場合に依よっては仕方なくきくことも……」

「じゃあ来週の日曜デートな」突然放恣へちんちんと笑う、「淑音しとねちゃんには約束取付とりつけけてあるから。久木奈緒ひさぎな子なちゃんて子知こってるか？ 其その子には淑音しとねちゃんから声懸かけてもらったから、四人で。いやあ淑音しとねちゃんからお前の了解取れたらってことでオツケーもらってさあ、やっぱ持つべきものは友達だねえこんなにあっさり了解してくれるなんて。まあ、まさか俺に借りがあるのに断ことわったりはしないだろうと思っただけだな？ じゃあ来週の日

曜だから忘れない様にねえ忘れても僕は全然構わないけど」

上機嫌で坪内は去って行った。その日の夜に淑音しとねに聞く。

「あー坪内君ね、私の所にも来てさ、どういうことって聞かれるもんだから、困っちゃってねえ、そしたら彼池あつちからじゃあ今度四人で出掛でかけようかと持ち掛かけられたから、つい唯諾オツケしちゃった」

「うん、まあ夫それはいいんだけどさ、久木さん？ 奈緒子ちゃん？ てもしかして俺おれに手紙くれた子じゃないの、だったら俺おれ断ことわつたのに凄すげえ気ますくない」

「ああ、夫それね」目を泳がして答える。「実は、ちやんと、断ことわってないんだよね、なんか言い辛づらくてさ。手紙渡したよおって、何か考えさせてくれてたってたよおって、言っちゃった」テヘツと言う感じで続ける。

様子を見て可怪おかしいなと思った、「お前それ、夫だけじゃないだろ、まだ他ほかにも余計なこと言

「ただろ」

「あー」指先で頬を搔く。「手紙読んで、感動してた見たいだよ、とか何とか……」

「打っ飛ばすぞ」嘆息を吐く。「夫で、四人で行くことに、なった訳ね」

「左右です」悄然れて淑音が答える。令人は考えた、行くべきか否か、答えがきまつている間に、故意と迷うのは馬鹿らしい、意地悪してやろうか、困らせてやろうか、想像の上での行いは、実際の上には現われない。

雨がふりはじめた。丁度映画がおわった所で、令人は窓を開けて手をのばす。雨は掌で炸けて水になった。淑音は眠っている。淑音は、決して、寝る時令人に倚らない。眠っている淑音に、変な気が起ることは有るが、此距離をつめられない。淑音は床に座って、ベッドに凭れて、眠っている。令人は窓に靠って淑音をみた。目をそらして、すこし考えると、淑音が帰る時に使う傘を、出して置く為に一度室を出た。

寧いっそ土砂降どしやぶりになれば、願ねがった邪念じあんは叶かなわなかつた。六月ろくがつが終おつて最初さいしょの日曜日にちようび、七月しちがつといふことを過剰かじやうに意識いしきしたのか、太陽たいやうは炳々乎へいへいことして天あまに騰あがつた。雲うみもなく、気温きんぱんはあがり、令人れいとはこんな日に歩き回まわるのかと暗澹げんなりした。

初めて真面まおもに会う久木くきさんは、思おもっていたより、可愛かわいかつた。男女おとこの「可愛かわいい」の合致あひあする事ことの少すくさに期待きたいしていなかつたが、意外いがいの感かんが萌もした。黒くろい髪かみを、後のちろで一つひとつに束たばねた、ポニーテールという髪型かみかたをしている。服ふくはズボンが膝ひざより下の、七分丈しちぶんぢやう、上うへは花柄はながらが淡あく点ちじてあるシャツを着きていた。赤あかい棗ざうのめがねを掛かけて「こんにちは」といふ。令人れいとは頭あたまを下くだげて「どうも」と言いつた。

淑音しよとねが花はなを見みたいといふので、寺てらを回まわることになつた。此町このまちには古刹こさつが多く、花はなで有名な寺てらがいくつもある。令人れいとは花はなに詳あしくないのでアジサイぐらいしか名前なまえがわからなかつた。

た。紫の花の、一つ一つが開いて、一団を成しているのを美しいと思う。その一団が、簇がり合って、一體をなしているのを美しくいと思う。しかし六月も終ると、枯れ始めている花も多く、その様を見窄らしいとも令人は思った。

坪内は固より大張り切りの體だった。淑音と坪内、久木さんと令人で二人ずつ歩くが、坪内の騒ぐ声が能く聞える。令人は話すのがあまり得意でないので黙ることも多かった。しかし久木さんは根氣よく話し懸けた。

「大町くんは花って好き？」

「嫌いじゃ、ないよ。でもそこ迄の興味もないかな、第一男がお花大好きってのもちよっと気もち悪くない？」

「ううん、そんな事ないよ、すてきだと思う。私、この町って、すごく好きなんだ。一つ々の季節に、色んな花が咲くこと知れるし、お寺も町並もすごくすてきじゃない？」

この町で育てて嬉しい」

「久木さんは、じゃあこの町で暮くらしていき
たいと思ってる」

「うん、大学もあるし、就職するのもここ
がいいな、大町くんは左そうは思わない？」

「おれは、全然、わかんないな、考えたこ
ともない。高校も漠然としか考えてないし、其その
先なんてもつとね」

坂や、階段を歩くので、汗を霑かいた。前で
坪内が叫ぶ、「遅いぞお、お二人さーん」淑音しとね
がとなりで笑っている、二人はどんな話しを
仕しているだろう、

「淑音しとね、楽しそうだね」久木さんがいう、
「坪内君って、面白いんだよ、いつも巫山ふざけ
たこといって、クラスじゃ人気あるんだ、て
いっても、大町君ほどじゃないけど」

「いまは面白い男が旬だっていうからな、
うらやましいよ、おれは、正直になにかをい
うこともできないから」

「それは……」なにか言おうと口を披ひらいた
が、続かなかった。

昼からあつまつたので、ご飯を喰べる必要はなかったが、少し休もうという事になり駅前を通りから選んで一つの店に入った。女の子と、坪内があんみつを頼み、令人は水を飲んだ。

「大町くん、甘い嫌いな」久木さんが訊く。

「嫌いっていう程じゃないけど、好んではたべないかな、格別おいしいとも思わないし」

「甘い物のおいしさを知らないなんて不幸ねえ」坪内が姿を作って答える、「夫とも何だ、お金がないのか、いいんだよあんみつ位お兄さんが奢って上げるから」

「水がすきなんだよ、放つとけ、でも甘いもの好きな男って多いよね、うちの兄貴が男が軟弱になったからだ、前はもっと甘いものが嫌いな硬派な男が多かった、て憤どおつたよ」

「あれ、でも、人士さん甘いもの好きじゃなかったっけ」

「そう、それも、生クリームで載ったプリン喰べながら言うんだからばかだよな」

令人と淑音で少し笑ったが、失敗ったと思った。兄の話しをしても一人には伝わらない。

淑音も感じた様で話しを変えた。

「じゃあ、是から、どうする。私は水族館に行きたいけど、なにか希望あれば」

「そう言われちゃあ水族館しかないでしょ」坪内がすぐに賛同する。「やったあ俺水族館すげえ好きなんだよね、もう三年ぶり位だけど。あの魚が泳いでる感じ、たまんないよね、スイスイツていうかスイーていうかね」

漠然とした印象しかのこってねえじゃねえか、思ったが口には出さなかった。淑音は久木さんにもきこうとしたが坪内が余り燥然ぐので水族館にきまった。何だかやりづらいなと思った。淑音は、ただ、なにも案が出ないと困るしほかの人が案を出しやすい様にして水族館といった丈だ。無論行きたかった事もたしかだろうがああ騒がれては引っ込み

が付かない。夫それにと思った。令人れいとは久木さんが口を抜ひらくのを見た。坪内が喋舌しゃべつていうのを廢やめたのだろうが希望があるなら言えばいいのと思った。平生ふだんとちがうということ考えた。

「まさか水族館とはなあ」女の子がトイレに行っている間、先に店を出た所で坪内は言った。「完全に盲点だったよ。やつぱり淑音しとねちゃんは発想からして違うね、発想さえもかわいもん、ああ今日という日が永遠につづけばいいのに！」

興奮する坪内を横目で見た。まさか、こいつに、気もちが動くこともないだろうがと思う。どうなんだろう。こいつならこんな調子で、「かわいいよ」とか「きれいだよ」とか、其そんな、自分ならためらう様な台詞せりふを、吐くことが出来るのだろうか。

又また歩き出すと、自然二人ずつの組ができた。淑音しとねと坪内、久木さんと令人れいと、坪内は、どうしてああ捷速すばやく自分の望む座を占めることが

できるのだろうと思う。久木さんにしたって、望む地位を手にいれている訳で、其所には自分の知らない技術が伏在するののか、運を天に任せて偶然に依った結果なのか、令人は疑がった。

久木さんを見ると「なに」と赧れた様子でいう。

「いや、其めがね」令人はいう。「西浜つて先生のに、似てるなと思つて」

「やだ、淑音みたいなこと言わないで、淑音なんて、どこに売ってるのなんて執固くきて来るんだよ、自分は目好いのに。もし同じめがねを掛けたって、距離が近づく訳じゃないのにね。距離は、近付かないと、近付けないんだよ、最近わかった。幻想は、距離をうめてくれないから、ちゃんと行動しなきゃいけない、淑音が、行動してないとは言わなげどき。でも淑音の場合行動すればする程距離が裸形になっていって、其んなの凄じくない、苦しいじゃない、もつと、しあわ

せになれる方法がさ、あるんじゃないかな」
久木さんは令人を見上げた。「淑音の場合す
ぐ近くに」

令人はすぐには答えなかった。距離のことを考えた。観覧する人々が、泳ぐ魚を見て、いつか離れていく。明るい水槽と、暗い廊下、続いていく広い部屋。令人は少し経って「そうかも知れないね」とだけ答えた。

西浜のことを考えた。ひよろひよると細く、背だけむやみに高く、頼れない印象が気に入らない。西浜は令人のクラスの数学を受け持っている。淑音にずるいと言われ知るかと思う。西浜は平生めがねを掛けていないのに、授業の時だけ掛ける。気にも留めていなかったが、淑音から、あれはいつも掛けてると目が疲れるからなんだって、キリツとして、さあ授業始めるぞって感じして、かっこいいよね。と言われて気どりやがってと思う様になった。西浜は数学で、基本的な計算をよく間違える、足し算とか、掛算とか、そんなもの

を。淑音しとねは他ほかの数学の先生からあれは西浜先生にとつて、中学レベルの問題が簡単すぎるせいだ、という情報を仕入れて来て頭がよすぎるんだねと誇らしげに弁護した。そんな訳があるかと令人れいとは思う。西浜が間違えて、生徒が指摘すると、西浜はごめんごめんと詫あやまつて訂正する。令人れいとは苛烈いらつく。

どこがすきなのかと思うことがあった。問い尋ただしたことはなかった。どこまですきなのかと思うことがあった。問い尋ただしたことはなかった。

水族館を見て、日の暮れるころ、砂浜を歩きたいと翼おすおす々ながら久木さんが提案した。赫まつか々な太陽は、海や、砂浜、山を燃やした。空は炎に焙あぶられた。三五さんごに簇むらがり嘆たんし賞する人々が、風情を殺す。自分も其その一人なのかと令人れいとは疑うたがった。然し断しかじる勇氣はもたなかった。

前を歩く二人が、ふざけて、砂浜を馳かけて行く。令人れいとは夫それを見送った。久木さんはいっ

た。

「私ね、ずっと、夢だったの。ここの砂浜を、好きな人と二人で歩くこと」

令人は立ち留った。

「もし、よければ、手紙の返事きかせて欲しいな。淑音が、大町くんが感動してたって教えてくれて、夫は、私に気を遣ってくれたからだってわかってはいるんだけど、でも、嬉しかった。私は大丈夫でもいいの。だから、正直な気もち、教えて下さい」

最低な女だなと思つて前の淑音を盗みみた。一時の同情のために誤解を与えた。夫でも、嬉しかったのなら、好かつたんだろうか。令人は答えた。

「ごめん、おれは、……」

「淑音のことが好き？」 潤んだ目で首をか上げた。

「そうじゃない、あいつとは、別にそんなんじゃない。ただ、中一の時に、おれ一人の女の子とつき合つてさ、全然うまくいかなか

ったんだ。だから、暫らくは、左右というのはいいかなって、夫丈のことなんだ、ごめん」

「そっか……」久木さんは顔をそらして海を見た。涙をぬぐった様にも見えたが、令人も顔をそらした。手紙はたしかに読んだ。しかし感動する程のことはなにもなかった。すきといわれて嬉しかった。しかし夫は夫以上のものではなかった。

波は寄せて返した。前の二人は、いつか歩いて此方へ向っていた。「じやあ、また、こういう風に遊ぼうね」元氣を見せて久木さんは笑った。令人はかすかに頷突いた。又距離のことを考えて、掛け様とした言葉をのどに仕舞った。

中学一年生の一年間、淑音は引越していていなかった。其生活になれた頃、淑音は帰って来て、其大人っぽくなったのに驚いた。しかも自分のことをだれよりも懐かしがってくれて、其態度にかわりがなかったのが（令人

が余りかわっていなかったせいかもしれないが、嬉しかった。

令人が贈った、陶器でできた、小さなイロカのキーホルダー、いま考えれば幼稚なものを献げたものだと思うが、夫を淑音は宝物といつてくれた。引越してから一年間、大事にもつていてくれた。先生とのつながり、理科室の鍵とも、一所にして持つていてくれた。だから宝物でありつづけるんだと思っていた。

四人で遊んだ帰り、令人と淑音だけが同じ駅なので、並んで帰った。令人がいった。

「久木さんから返事欲しいっていわれたから、ことわったよ」

淑音が令人を見る。「そつか。私も、坪内君にね、告白された訳じゃないんだけど、つぎは二人で遊ぼうっていわれたから、ことわった。こういう風にみんなでないけれど、二人では遊べませんって。ちゃんと断わるのって大事なんだね、坪内君、まじめな顔して、

わかった、ありがとうって言ってた」

「お前、そう言うんなら」久木さんのことを思った。「二度と手紙とか貰もらってくんなよ。

あと適当に返事返すなよ。久木さんがおれが感動してたって聞いて嬉しかったって言ってたぞ、きょうだってもしかしたら期待して来てたんじゃないのか、ああいうのはもう絶対にやめろよ」

「なに、私が悪いの」淑音しとねが怫然むきになった。

「そもそも令人れいとが直接奈緒子ちゃんに答えて上げればよかったんじゃん、なに、私わたしがわるいみたいにいっちゃって。令人れいとには二度とあんない子は寄よって来こないよ、一生一人いっしやうひとりで後悔くわいごしろ！」

淑音しとねの言い様ようにカチンと来た。二人は黙もくって帰かえった。駅えきからは淑音しとねの家うちの方が近いので「じゃあな」と門かどにむか対たいう淑音しとねに声こゑをかける。

反応はんいはなかった。又またカチンと来たがどうせあしたには元もとに戻もどっている。言いいきかかせて二件にけんとなりの自家うぢに向むかった。

「令人！」ポケットに入れた鍵が奥にいつて仕舞い、出すのに手間取っているとうしろから声が追ってきた。振り返ると蒼ざめた顔の淑音がいる。胸に獅がみついて来た。

「鍵が、鍵がないの」焦った様子でいう。

「理科室の鍵」

「もってたのか」訊くと頷突く。「何で学校でもないのに鍵を」不注意にいらつく。

「だって、宝物だから……」声が途絶えた。

掛ける言葉を見失なう。「どこまでもってた」現状をたしかめる。「最後に見た記憶があるのは、どこだ」イルカのキーホルダーを、思い浮べる。

淑音は考える、「駅まで、駅まで持ってた。

改札を通る時みた。多分、駅からうちまでの間に……」言うので探した。まず淑音の家の門周辺を探し、駅へ緩くり戻って行った。もう夜になっていたので、携帯電話のライトで道を照した。大した助けにはならなかった。淑音は「どうしようどうしよう」とくり返し

た。耳障りに感じた。淑音が令人のシャツの、端を掴む。ほんの少しの動きづらさが、鬱遠しさをつのらせる。

平生歩く時の倍の時間を懸けて、駅に辿り着いた。なかったが、此所だろうと、鑑定をつけていた。改札を通る時に、落したんだろ。しかしもしなかったらと思つた。又戻つて、見つけられるのか、駅で見たというのが、もし淑音の記憶ちが이었다ら。他念を払おうと、床を凝視して歩いた。

駅員に落し物がなにか聞いて来いというまで、淑音は冥裡と突っ立っていた。通行人にはよくない目でみられた。駅に鍵は届いていないという。令人は焦っていた。どうして俺れがと思つた。其時、床の隅の方に、なにかあるのに気づいた。

「あ」あげた声に、発見の喜びはなかった。淑音はすぐに飛んで来る。落した鍵は、蹴られ、踏み付けられたのだらう、イルカのキーホルダーは無残に摧けていた。自分の思

い出の象徴。淑音はすばやい動作で鍵を拾うと、令人の胸に額をおし付けた。

「ありがとう」淑音はいった。「よかった、よかった……」其手は組み合せられて、中には鍵が収まっている。

価値は変ることを知った。重さは変ることを知った。淑音の宝物のそばで、自分の贈り物は、宝物でなくなっていた。淑音の「よかった」には、明かな安堵が込められていた。令人は淑音の肩に手を置いて、よかったなという、引き離したくても離せない、引力を、疎しく感じた。

激しい夕立が降った。令人は体育館で其音をきいた。淑音の雨だなと思った。しかし糸かな時間で雨はやんだ。

淑音と、令人の家の裏の方、海と反対の側には小さな山がある。公園があるので、小さい頃は能く二人で遊んだ。いまでもバスケットボールの練習に行く。

公園の端の方には、ベンチがあつて、海と、町、家々が広く見渡せた。波の音もかすかに聞える。淑音しとねはなにか有るとよくここへ来た。いまもいるだろう。令人れいとは家に帰ると私服に着換きがえた。夜は迫つて、日は追い出されてい

る。
淑音しとねがすきな、西浜という教師、彼が結婚したという。話し好きな女子が、大学生の時からつき合つていた彼女らしいと、情報を手に入れて流した。どの時点で淑音しとねがしたかは分わからない。だか耳には這入はいっているだろうと、令人れいとは考えた。

こどもの時は息を切らして登った坂を、ゆっくりと歩いた。昔むかしは、大人になれば、息を切らさず馳かけ登れるだろうと、夢に見た。しかし此年このになつて覺えたことは、自分のペースで歩くと言うそれだけ 丈夫のことだ。体力は比べものにならない程即ついた。だが息を切らさずに登り切れることはむりだろう。

淑音しとねはないているだろうかと思つた。泣い

ていたら、どんな言葉を懸ければいいだろう。泣くなよ、元気出させて、思い付く言葉はどれも幼稚だった。是も、大人になれば、身に着いているだろうときめ込んでいた。ドラマや小説にある様に、気の利いた台詞を吐く。左ういう様に自動的になっているのではと、自然に、思っていた。育つ自分のまわりには、そういうすてきなもの許りがあつたから。

もう十五年も生きたのになと令人は思う。十五年経つても、まだこどもの儘だ。色々なことが、わからない。でもわかることも増えて来て、きつと、もう少し経てば色々なことがわかっていくのだろう。でも、いまは、わからない。いますぐに、分る様になればと、令人は思った。

思った通り、淑音は居た。ベンチに座って、隠れた太陽を、残して行ったわずかな赤を、眺めている。空と海。令人は淑音に言った。

「座ると濡れるぞ」

淑音は制服の儘でいた。白雨の後なので、

木でできたベンチは湿っている。淑音はちらりとベンチを見た。

「どうせもうすぐ夏休みだし」

淑音は平静だった。元気はなかったが、おちついて、取り乱した様子はなかった。注意したが令人も座った。淑音は海が見える側に座って、テーブルに頬杖をついている。令人は対いに座を占めた。但淑音に背を向けて、テーブルに肘をのせて、海を見た。

須臾夜になった。雨あがりの空は澄んで、晴れ渡り、家々の灯がよく見えた。これをきれいだと形容する人もいる。一つ々々の家の明りが、人が生きている証なのだ。令人は左右思わない。自分に関係のない人間が、あれ丈の数存在するとは、どうしても想像できない。しかし其観念は、別に、どこへの拡がりももたなかった。

淑音が喋舌った。

「先生が結婚するって、聞いた？」

「ああ」

「ねえ、あれって、勝手じゃない。私、あ
んだけ好きってこと、前面に出して話してた
んだからさ、私に丈は、せめて、直接教えて
くれてもよかつたんじゃないかって、思うん
だ。諦めさせる為とか、左んな理由でも、
よかつた。でも私が聞いたの、真理ちゃんか
らだよ、信じられる？ あの子が散々噂で流
した後。私先生に訊きに行ったよ、結婚した
ってほんとですかって、先生、うん、左うな
んだって、照れた、恥しそうな顔して、言
ってた。しあわせそうな顔。私怒りたくて、
其様なのよくない感情だつてわかつてたけ
ど、でも、私が好きなのわかつて欲しくて、
思い知らせたくて、行ったのに、どうしたら
いいかわかんないじゃない。私怒って、これ
お返ししますって、部活もやめますって、鍵、
返して来ちゃった、ごめんね、令人が折角探
してくれたのに、私、あの時、なくしたらど
うしようって、もう、鍵、任せてはもらえな
いんだらうって、そしたら先生と話す時間が

なくなるって、怖くて、だから、令人がみつ
けてくれた時すごい嬉しかった。嬉しくて、
よかったって思っ、なのに、鍵、返しちゃ
った。ごめんね、令人に、私、なにも返せな
い、迷惑かけたのに、もう、なにものこつて
ない、先生のこと好きだったのに、もう、全
部きえちゃった、私のもの、全部、のこらな
かった」

泣き出した淑音に慌てた、「いいんだ」や
さしい言葉を探す「お前のこと好きだから」
淑音の涙が一瞬やんだ。「私のこと……」
聞き返すように独語く。「令人が」

「そう、だから、いいんだ」言葉を選ぶこ
とができない。どうすればいいかも、わから
ない。上擦った気もちと、どうにかしたい気
もち、泣くなよと思う。元気出せよ……

「ごめんね、ごめんね、ごめんね」淑音が
一層はげしく泣いた。夫をみて、落ち着きが
少し戻る。仕方ない。令人の身体はいま淑音
の方に向いていて、頬杖をつく、町と海を顧

り見た^み。夜の海は、光を呑み込んで、見えな
い。波の音だけ届く。空は霽^はれて、点々と浮^{うか}
ぶ星が、雨の遠きを感じさせる。